

ヨハネ 20:1-9

20:1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

20:2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

20:3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。

20:4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。

20:5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。

20:6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

20:7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。

20:8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。

20:9 イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

1) 新しい世界の始まり

もしもイエスが復活したのではなくて、たとえば、隣で十字架にかけられた罪人が復活したとすると。

みんなよろこばないでしょう。なんの意味もない。

イエスが復活するからこそ意味がある。それは、どんな意味なのか？

「世の罪を除く神の小羊だ」洗礼者ヨハネがイエスをさして言った言葉です。それが、イエスの復活によって確実にになった。実現したということです。新しい世界が始まりました。だからイースターはおめでたい、きょうは新しい世界がはじまった記念の日、復活の朝、復活の日曜日です。

2) 三つの見る。

さて、今日の箇所は「からの墓をみる」場面です。三人が三者三様にからの墓を見ます。

1.イエスの墓石がどけてあるのををマリアが見つけ、ペトロに知らせに帰る。(1節)

2.ペトロは墓に入って亜麻布を見る。(6節)

3.もうひとりの弟子は墓に入って見て信じた。(8節)

翻訳では同じ見るですが、1節、6節、8節の〈見る〉という動詞は原文では全部違っているんです。

<8節の「見る」にはこんな意味の含みがある>

イエスの最初の弟子になった二人とイエスの出会いの場面（ヨハネ 1:35 以下）もとは洗礼者ヨハネの弟子であったアンデレともう一人（名が記されていない人物）は、洗礼者ヨハネの「見よ、神の小羊だ」という言葉に促されて、イエスの後に従っていきます。イエスが、振り返って「何を求めているのか」とおっしゃると、彼らは「ラビ、どこにお泊りですか」と尋ねる。するとイエスは「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃる。ここでの「分かる」はホラオウという言葉で、きょうの8節では、〈見た〉と訳されています。その言葉に従って、二人はイエスがどこに泊っているかを見て、一緒に泊った。そして見て分かった、そのような意味がホラオウには含まれています。

三人は三人とも同じ現場にいて〈見て〉います。見た「もの」はおなじでも見た「こと」は微妙に違います。また見て分かったことは違ってきます。

〈ちょっと横道〉

きょうの箇所にななしで「愛された弟子」という人物がでてきます。いまホラオウの説明で紹介した1章にも「名なしの男」がでてきます。伝統的にはゼベダイの子ヨハネと解釈されていますが、「名なしの男」はヨハネ福音書にしかでてきません。

3) 「主」であることが「分かる」

イエスの復活は、ただ、死んだ人間が復活したということではありません。そうゆうことを単純に信じるのが復活信仰じゃありません。それだけではイエスの復活を理解した信仰とはぜんぜんいえません。

イエスは「世の罪を除く神の小羊」であり、その復活は、私たちの罪を取り除くため、赦すためです。

これは教会が長い年月をかけてまとめあげた教理です。

教理を学ぶことは大切ですが、教理がわかったところで、理屈をいったところで<分かっている>ことになるのでしょうか。

マリアやペトロ、また愛弟子のように、私たちも「からの墓」を見るだけで、その意味がほんとうのほんとうに分かっているのでしょうか。

ガリラヤで宣教を始められたイエスはたくさんのかたを語りました。

「人よ、あなたの罪はゆるされた」(ルカ 5 章 20 節)

「貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである」(ルカ 6 章 20 節)

「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」
(ルカ 7 章 50 節、8 章 48 節)

「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行く人たちのことである」(ルカ8章21節)などなど。

わたしたちは、イエスと出会いたい、イエスを信じたい、分か
りたいと願いつつ信仰に生きるしかありません。

求める人に、求め続ける人に、かならず復活の主イエスは現れ、
わたしたちそれぞれに必要な「みことば」を聞かせてくれる、
復活の朝である今日、その思いを新たにしましょう。